

児島虎次郎宛藤島武二書簡について——翻刻と解説

児 島 薫

一、藤島武二と児島虎次郎の関係について

藤島武二（一八六七—一九四三）と児島虎次郎（一八八一—一九二九）については、改めてここで詳しく説明するまでも無いだろう¹。藤島武二は一八九六（明治二九）年東京美術学校に新設されることになった西洋画科の助教授に八月二日付けで任じられ、以後長く美術学校で洋画教育にあたった。文部省美術展覧会では八回展から審査委員、帝国美術院発足後は、帝国美術院展の重鎮として活躍した。晩年には帝国芸術院会員、文化勲章受章といった国家的な榮譽に浴した。

一方、児島虎次郎は一九〇二（明治三五）年九月に東京美術学校西洋画選科に入学しており、同期入学者には森田恒友、山本鼎、正宗徳三郎、高木誠一（背水）らがいた。²常に成績優秀であった児島は二度の飛び級を経て一九〇四（明治三七）年七月に卒業する。同期の卒業生には熊谷守一、和田三造、青木繁、山下新太郎らがいた。³児島が美術学校の師の中でも特に藤島武二を尊敬し信頼していたことについては、既に松岡智子氏、柳沢秀行氏による指摘がある。⁴

児島は一九〇七（明治四〇）年東京勸業博覧会に《なさけの庭》、《里の水車》を出品し、《なさけの庭》は西洋画部門で一等賞受賞、宮内省

買い上げとなる。そしてその才能を評価した大原孫三郎の支援で渡仏する。一九〇八（明治四一）年三月十五日、パリに到着し、一九〇〇年頃から日本人留学生の定宿であったオテル・スフローに投宿した。⁵そして先に留学していた山下新太郎、有島生馬らと会い、その紹介でマダム・ルロアの下宿に住む。まもなく腸チフスのため二ヶ月もの療養生活を送り、その後六月からはグレー・シュル・ロワンを拠点にする。

藤島は児島の卒業後である一九〇四年十一月にフランス、イタリアへの官費留学に出发し、児島のパリ到着とは入れ違いに一九〇八年からローマに移っている。帰国直前の同年十一月十九日にパリに戻り、有島たちと行動を共にし、その後十二月十一日にマルセイユから帰国の途に着いている。⁶この頃には児島はグレーに滞在しており、パリに出て藤島と会った様子は特に知られていない。⁷

有島生馬は藤島の元に内弟子として入門し、留学前に藤島によって山下新太郎を紹介され、藤島を囲んで親しく往き来した。⁸そして帰国後は文展の審査への不満を共にし、二科設立の働きかけを当局に対しておこなった。しかし藤島は文部次官福原隼次郎と美術学校校長正木直彦の説得を受けて彼らと袂を分かち、一九一四年に八回文展審査委員に任じられた。有島、山下らは二科を設立して文展を離れた。この経緯において

師弟の間には深い亀裂が生じた。⁹

一方児島虎次郎は一九一二年末に帰国すると岡山に住んだ。大原孫三郎との関わりは一層深まり、大原の依頼で絵画収集などの任務に就く。当時としては異例のことであるが、三度もフランスに渡り、滞欧中、また日本からも、作品をフランスのサロン・ナショナルなどに送り続けた。¹⁰一九一五年十月には酒津にアトリエが新築され、ここを拠点としていくことを明らかにしていた。大原家の収集品の展示などの仕事も増える中、酒津からヨーロッパや東アジアへ頻繁に旅を重ねていた児島にとって、東京で帝展などに関係する余裕も無かったであろうし、関心も薄かったであろう。

しかし有島や山下が離れてしまった後、藤島にとって優秀で礼儀正しい児島は特別の存在となっていたようである。一九一五年十月十日に上京した児島は藤島のもとを訪ねてアトリエに泊まっている。¹¹このアトリエは留学から帰った藤島が建設した自慢の建築であった。¹²十二日には二科展を見てメンバーたちと旧交を温め、さらに十四日には藤島に誘われて文展の招待日に同道している。藤島は前年に二科設立運動から離れて文展審査委員を拝命したものの出品はしなかった。この年は初めて審査委員として出品し、《匂い》、《空》を展示したので、藤島も緊張の中で招待日に臨んだであろう。そのような時に二科のメンバーたちとも仲良く会って作品を見てきた児島を連れて文展に行く藤島の心情を想像すると、なかなか興味深いものがある。さらにその後児島は藤島のアトリエで久しぶりに裸体モデルを写生したり「琵琶を持て居るコスチューム」を描き始めたりしている。¹³児島に対して親切な計らいをしていると取れるが、藤島にとってはサロンで認められた俊才児島の製作を身近に見て勉強する機会でもあった。文展審査委員としての重責もあり、一方

の二科展とも結果的に対抗する立場にもなっていた中で、藤島自身が実物写生にもとづきながら新しい表現をおこなっている児島に学びたい思いがあったのではないだろうか。《静》（一九一六年、東京国立博物館）、《カンピドリオのあたり》（一九一九年、大阪市立近代美術館建設準備室）には画面全体を大きな点描風のタッチでおう表現をおこなっている。点描的な表現は、これに先立つ《朝鮮風景》（一九一三年、三重県立美術館）にもみられ、《花籠》（一九一三年、京都国立近代美術館）では大きな筆で鮮やかな色彩で画面を彩っている。滞欧中にポスト印象派に触れたことがこうした表現につながっていた可能性を考えることができるだろう。しかし《静》などで画面をほぼ同じ大きさのタッチを並べて覆うような描き方は《朝鮮風景》の柔らかな色彩とは少し異なり、《花籠》の自由なストロークとも異なる。またこの時期にしかおこなわれていない。藤島が児島の制作から触発された試みであった可能性もあるのではないだろうか。

児島は一九一九年三月に東京美術学校で個展を開くことになり、準備のために二月に上京した折りに、藤島と何度か会っていた様子である。¹⁴その後三月十六日に再び上京し、個展のための展示などをおこなった。招待日は三月三十一日で翌日から三日間の開催であった。卒業生がこうした個展を美術学校で開くことができたのは大きな栄誉であっただろう。この間の三月二十九日には藤島が有島らとの関係を復活させたいと児島に仲介を依頼している。これを受けて児島は有島、山下と急いで連絡を取り、四月四日に赤坂三河屋で三者を引き合わせる会を設定した。¹⁵このことについて山下は「数年後、児島虎次郎の斡旋にて和解、交際を復活せるも、一度破れたる繼目が如何にも目立ちて、先生終生の損害となつたことは返へす返へすも惜しいことであつた」と回想しており、一応和解

はしたものの感情的なしこりは解消しなかった。

二、藤島武二から児島虎次郎への書簡

藤島武二から児島虎次郎のもとに送られた書簡（個人蔵）についてはこれまでも調査がなされているが、筆者もまた調査の機会をいただき、二三通の書簡（内一点は葉書）を確認した。¹⁷その多くは中国製とみられる木版色刷の箋紙に書かれている。これらについては、児島虎次郎研究のなかでは以前から知られており、松岡智子氏によってその調査を踏まえた著書がまとめられ、うち三通は全文が紹介されている。¹⁸しかし藤島武二研究の中ではこれまで触れられてはならず、筆者自身も藤島と児島虎次郎が頻繁にやりとりをする師弟関係にあったことについて柳沢秀行氏からご教示をいただくまで気付かなかった。そのため今回は藤島研究の視点からこれらの手紙を読み説きたい。既に翻刻された三通を省くことも考えたが、前後のつながりによって年代を特定するなどの説明の便宜から、本稿でも掲載することとした。一部封筒と中味が入れ違っているもの、消印が不明で年代を推定するしかないものも含まれるが、可能な範囲で年代順に並べることを試みた。また児島の妻、友（子）氏宛の書簡も三通あり、今後紹介してゆきたい。本稿では紙面の関係もあり、そのうち児島虎次郎宛の十五通を掲載し、残りはまた別稿に譲りたい。¹⁹

さて一連の書簡からは、藤島がフランスから「マヌキャン」を取り寄せようとして児島に仲介の労を取ってもらったり、アマン・ジャンへの紹介状を頼んだり、大小様々なことで児島を頼り、児島がそれらに忠実に答えてくれていた様子を知ることができる。さらには藤島の健康を気

遣い、白桃や梨を送っている。これに対して藤島は、児島をなんとか中央にひっぱりだそうと、帝展へ作品を送ることを強く薦め、帝展審査員への道を開き、洋画界のリーダーへと導こうとしていたことが明らかになる。さらには聖徳記念絵画館壁画の制作を躊躇する児島に対して、半ば叱責するような手紙を送ってまで説得している。優秀な児島を評価すればこそであり、すでに老境に入り病気がちになっていた藤島には、早く児島に後を託したい思いもあったのかもしれない。しかし児島が特にそうしたことを望んでいたようには読み取れない。東京と倉敷の往復を繰り返して壁画制作のために苦心を重ね、²⁰加えて帝展に出品し鑑査をするなどの無理を重ねた結果、児島は一九二九年三月八日に四七歳の若さで世を去っている。過労の原因は壁画制作だけではなく、一九二八（昭和三）年二月の大原コレクションによる「泰西美術展覧会」（東京府美術館）の開催に際し実務を担当したことが、直接の引き金であったかもしれない。しかし藤島が児島を東京の仕事に関わらせていったことが結果的に彼の負担を大きくしたことも否定できない。

児島の在学中、一九〇三年の六回白馬会展に藤島武二は《諧音》を出品する。これは半裸の女性が座って天平時代の楽器である阮咸を奏する図であったが、出品作は現存しない。児島虎次郎によるこの習作の模写とみられる作品があり、『生誕130年児島虎次郎展』に「12《諧音》模写」として出品された。²¹児島が藤島の制作中に一緒にモデルを囲んだのか、あるいは藤島の習作を模写したのか、という選択肢があるが、これが藤島自身の習作である可能性も考えられる。²²晩年の児島がこの作品を自分の画室の壁に飾っていたことを示す写真も残されており、²³いずれにしても児島が藤島に対し敬愛の念をずっと抱いていたことをうかがわせるものであろう。

(付記)

今回の書簡の調査は、大原美術館学芸課長柳沢秀行氏からご教示を得て二〇一二年に行ったものである。柳沢氏より多くのご指導を賜りましたことにお礼を申し上げます。そして貴重な資料を調査をお許しくださいました児島塊太郎氏にはこの場をお借りして感謝を申し上げます。なお、その時には翻刻を写真入りで紹介することまで思い至らず、悪い画像をここに掲載することをお許しいただきたい。また私の力不足のために翻刻までに長い時間を経ってしまったことについてお詫びを申し上げます。なお、手紙の読解につきご指導をいただいた森登氏にも深く感謝いたします。

註

1 児島虎次郎に関する研究は、『生誕130年児島虎次郎展―あなたを知りたい』展図録、大原美術館、二〇一一年に詳しくまとめられている。評伝には、児島虎次郎の未公開の日記(『児島日記』)に基づいて編んだ児島直平『児島虎次郎略伝』児島虎次郎伝記編纂室、一九六七年、及び松岡智子・時任英人編『児島虎次郎』山陽新聞社、一九九九年がある。筆者も一部日記の原文を調査した。また児島の業績について学術研究として総合的にまとめたものとして松岡智子『児島虎次郎研究』中央公論美術出版、二〇〇四年が重要である。児島虎次郎の動静については、特に言及していない場合は、吉川あゆみ「児島虎次郎略年譜」『生誕130年児島虎次郎展―あなた

を知りたい』展図録、大原美術館、二〇一一年、一八八―一九二頁、によった。

2 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史東京美術学校篇』ぎょうせい、一九九二年、一四五頁。

3 前掲『東京芸術大学百年史東京美術学校篇』、二五八頁。

4 前掲、松岡智子『児島虎次郎研究』、一八二―一八四頁。松岡氏は今回筆者が翻刻を掲載する手紙類については既に調査されており、児島が藤島に信頼を寄せていたことを読み取っている。また前掲『生誕130年児島虎次郎展』図録、二六頁、柳沢秀行作品解説にも指摘があり、直接ご教示を受けた。

5 詳しい旅程は前掲、松岡・時任編『児島虎次郎』、三〇―三三頁を参照した。

6 児島薫「研究資料黒田清輝、久米桂一郎宛藤島武二書簡(三)」『美術研究』四一七号、一二二頁。

7 児島の動静については前掲、松岡・時任編『児島虎次郎』三七頁を参照。

8 藤島と有島、山下のこの時期の関係については、児島薫「梅原龍三郎のヨーロッパ体験と日本へのまなざし―有島生馬、藤島武二との比較」『日本近代絵画の巨匠 梅原龍三郎展』、二〇一五年、鹿児島市立美術館、十二十六頁、で述べた。

9 この経緯については以下にまとめた。児島薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(三)」―留学前後の動静を中心に『美術研究』四一七号、八二―八四頁。

10 児島のサロン出品作については、サラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品について」『生誕130年児島虎次郎展』図録、一六〇―一七〇頁にまとめられている。

11 これら児島の動静は『児島日記』をもとに前掲松岡・時任編『児島虎次

郎』、九三頁に翻刻されている。

12 前掲、児島薫「研究資料黒田清輝、久米桂一郎宛藤島武二書簡（二）」七九―八二頁。

13 『児島日記』によれば、児島は家から子供が病氣だという知らせを受けて、十月二四日に岡山に帰った。その間に東京美術学校に通って制作していた。一連の児島の動静については松岡・時任編『児島虎次郎』、および前掲『生誕130年児島虎次郎展』図録、八三頁、柳沢秀行解説にも紹介されている。

14 松岡・時任編『児島虎次郎』一一二―一二四頁。

15 『児島日記』から筆者が確認した。

16 「山下新太郎年譜」『山下新太郎展』石橋財団ブリヂストン美術館、二〇〇四年、八七頁。

17 このうち二通は封筒と便箋が不一致であるので、これらを別々のものとして数えると二五通となる。

18 前掲、松岡智子『児島虎次郎研究』中央公論美術出版。三通の翻刻全文は、前掲、児島直平『児島虎次郎略伝』本文中、及び松岡・時任編『児島虎次郎』山陽新聞社、「資料篇」に掲載。

19 残りの児島虎次郎宛書簡と友子宛書簡は、『実践女子大学文学部紀要』第五十九集（二〇一七年三月）に、「藤島武二から児島虎次郎宛書簡からみる師第の交流―昭和期を中心に」として公刊されるので、併せてご参照願いたい。

20 壁画制作の詳細および児島の制作の苦心については、前掲松岡智子『児島虎次郎研究』二二三―二五六頁に詳しく論じられている。また習作については前掲柳沢秀行『生誕130年児島虎次郎展―あなたを知りたい』展図録解説、一四八―一五一頁。

21 三四・〇×四三・三cm、油彩・画布、一九〇三年頃、個人蔵。

22 この作品が藤島自身の作品である可能性については、柳沢秀行氏が示唆

され、ご教示を受けて調査させていただいた。客観的に証明する材料が不足しており断定することはできないながら、私見では、絵具の色味や筆触からは藤島作品と考えてもよいのではないかと思われた。

23 この写真も柳沢氏のご教示により拝見させていただいた。同じ壁には多数の小品が飾られているが、その中に児島自身の作品が無いことも、この習作が藤島作品である可能性を否定しないとのこと意見をうかがった。

一、一九二一（大正十）年三月二日付書簡

貴家益々御清祥賀上候 扨て前便にて御送り申上候絵の
半切の方ハ三橋先生ニ御渡し被下度願上候

尚右畫写真の方ハ過日御話申上置候分にて以前より伊太利
人ペッシー君より依頼され居候儘 兎に角大原様に御目
に掛け被下度願上候

右の内マスクを持つた女の絵ハ ナッチエ、ジャンルの方はフラゴナール
との事にて執れも室内装飾には最も適當の品に有之

後者の方は殊に絵も巧妙の出來に候得共小生御勧めは不
出來候 他の宗教畫のパノーは シエナ派の画にて高サ

二メートル位も有之伊太利派プリミチーフの見本としては
好適のものにて此位の品は彼国にて當時輸出禁制の爲め

日本にては無論當分他に見ることの出來ないものと

被存候 若し藝術に興味を持つた人あらば是非

勧め度い様な氣も致し候 当地にての好事家も趣味

の上より宗教畫を好まぬ傾き有之候 他の如何はしい画が

相當の高價に賣れたに不関此絵が未だに残り居候

始末に御座候 兎に角御一覽之上被為思召無之候ハ、

乍御手数數御返送被下度奉懇願候

三月廿一日 藤島拝

児島賢兄

尚大原様に宜敷御傳声奉願候

（封筒表）消印 大正一〇年三月二日

岡山縣 倉敷町酒津

児島虎次郎様

台啓

(封筒裏)

東京市本郷

曙町

(藤島武二)

三月廿一日

◇ 赤色の箋紙に記す。児島虎次郎は一九二一年二月に二度目の渡欧から帰国したところであった。三月には倉敷で「現代仏蘭西名画家作品展覧会」が開かれ、児島が大原孫三郎の命を受けて収集した二七点が展観されている。そうした時期に藤島がイタリア人「ペッシー君」なる人物から西洋画の売り込みを受けて児島に紹介をしていたことがわかる。

二、一九二一（大正十）年八月十二日付書簡

残暑難凌候處高堂益々

却説先般拝眉之際一寸御話

御清祥奉賀候

致置候件即中央畫壇の為

久敷御疎濶ニ打過心外ニ存候

御盡力相願ひ候段其後の御意

折柄先月上旬より病臥之

向豫め小生まで密かに御洩らし置

為め重て御無音平ニ御海容

被下候義相叶間敷候や 右得貴

願申上候 病餘尚静養を要

意度候 八月十二日

し候得共漸其快方ニ向ひ候間

児島兄 鑑 藤島拜

御省慮可被下候

尚過日ハ御見舞状を辱ふし奉深謝候

御令閨ニ宜敷御鳳声願申上候

（封筒）消印 大正十四年七月二十日、封筒裏に「七月廿日」の記載。

封筒の文字の翻刻は手紙番号十一として掲載。

◇ 封筒は中味と合っておらず、封筒に相当する手紙文は不明。ここに掲載した手紙文は、次の（三）に示す手紙と同じ白字に赤の瑞雲模様の便箋を使用しており、内容が整合するため、大正十年のものと判断した。文面から藤島が七月上旬から病氣であったことがわかる。「中央畫壇の為御盡力」が何を意味するのか具体的には書いていないが、そのことについては既に藤島が直接会った時に説得を試みていた様子であり、おそらく児島が即答しなかったので、改めて手紙を送ったのであろう。

三、一九二一（大正十）年八月十三日付書簡

畧啓 昨日の信書中 中央畫壇云々

の件ハ当局者よりの内交渉と云ふが如きものにては断じて無し 單に

先般拜眉之折の話の連續と

可被思召候 扱て本年は彼の方

面にも多少の異動可有之候と

被察候ニ付前交渉為し候

際ニ處する貴兄の内意を伺ひ

候までに候間可然御含み可被下候

小生は貴兄の意志ニ反する行動を

強ゆることを好まず候得共別ニ深

き理由なき限は社会奉仕の意味

にて此方面ニも多少の御盡力ありては

如何と存候次第ニ候 併し斯る

問題は各自の絶対自由を尊

び候ことなれば御随意ニ御決定

可有之候は申すまでも無き事

ニ候 實は小生ニも本年は病

餘未だ製作の準備も不出來

或は休養致す可きかとも存居候

此事ハ当分他へ御洩らし無く候

様呉々も願上候 前信簡に失

し充分意を不盡 念之為改めて

得尊意度候 敬具

八月十三日

藤島拝

席次郎兄再鑑

（封筒表）消印 大正十年八月十三日

備中倉敷町酒津

兒島席次郎様

台啓

（封筒裏）

東京駒込曙町

藤島武（二）

八月十三日

◇ 本書簡は、兒島直平『兒島虎次郎略伝』一四五—一四六頁及び松岡智子、時任英人編『兒島虎次郎』山陽新聞社、一九九九年、「資料編」【22】として紹介済みである。

藤島が前日に送った手紙に対し補足を書き送っているが具体的なことは伏せている。（二）とした手紙と日付が一日違いであり、内容からもこの二通が連続して発信されたものと判断できる。藤島が兒島に「中央画壇」で活躍することを期待して何らかの根回しを行っているらしいことが伝わる。藤島はこの年の帝展には出品しておらず、手紙の最後の方で病氣のために製作の準備ができなかったので休養するべきか迷っていることを書いており、このことが帝展出品のことであれば、兒島にも帝展出品のことについて書き送っていたと考えてよいだろう。

四、一九二三（大正十二）年二月一日付書簡

十二月二十日附の御手紙 昨日落手拝誦
致候處大兄益々御健勝賀上候

扱てマヌキヤンの件は種々御配慮を煩ハし
奉深謝候 右は一十六百法の分を購入
し度いと存じ早速送金可致候處

三月早々御地御出發との事なれば

三十日足らすの餘日にては到底間に合ひ

不申候と存じ間々扣へ申候 万一此手紙

が御滞留中に届き候ハゞ 乍御手数 右之品購入の約

束丈 にも 先方に御取きめ置き被下度奉願候

孰れ御帰朝拝眉之上御話承り候上

送金致し現品を送つて貰ふ事に

可致候

毎度御葉書賜はり且ツ雜誌等御

惠送に預り御芳情奉深謝候

当方よりは横文字の *adresse* を書くのが存外

面倒の為か乍心外いつも御疎情に打過

候段平に御放免願上候

大正十二年二月一日 藤島武二

児島席次郎兄

尚御無事御帰朝の日を切に待上居候

（封筒無し）

◇ 文面から滞欧中の児島に藤島が送った手紙であると思われる。藤島が児島にマヌキャン（マネキン）の購入を依頼しており、児島から商品の種類や値段などを前便で知らせていたようである。それに対し、藤島がこの手紙で一六〇〇フランの品の注文を依頼している。また、児島がヨーロッパから藤島に葉書や雑誌などを送ってくれたことへの礼を述べており、師に対する細やかな心配りをうかがわせる。児島はパリを発つ前日の三月七日午後、懇意の画材店ラモレルの店でマヌキャンを注文している（註1）。

この後マヌキャンが届くまでには紆余曲折があるが、藤島旧蔵の等身大マヌキャンは小堀四郎家に伝えられていたという。

（註1） 児島直平著『児島虎次郎略伝』一六八頁。

五、一九二三年五月二十日付書簡

拝啓 其後御不沙汰に打過候處御帰朝後
貴家御一統様益々御機嫌よろしき事と
察上候

扱て例のマヌキャンの件に就ては御出發間
際に一方ならぬ御配慮を煩ハし深く奉
銘謝候 小生の手紙は恐らく彼地御出發
後に届くならんと察し居候處幸に間に
合ひ候趣仕合せの至に存候 就ては右代
金の儀御立換へ置き被下候由 是亦 厚く御礼
申上候 為替相場は時々変動はげしく
且つ現品代金以外に種々雜費掛り候
筈なれば必ず御迷惑にならぬ様に御換
算の上御知らせ被下様呉々も願上候
尚荷造費及運送費等は發送先より請
求可有之候や 此点も御腹藏なき所を御洩
らし被下度単に御願申上候
御用も片付き候ハゞ自然近日御出京可有之候 久々
振りにて御面語の菑びを得度く折角御待申上
居候 小生も目下茅屋新築中にて月末頃
には大体落成可致以後御滞京中の御宿
泊には是非拙宅の方へと御定め置き被下様切に
祈上候 餘は拝眉の機に譲り置候

勿々 敬具

五月廿日

武二拝

児島大兄台鑑

御令閨に宜敷御鳳聲奉願候

(封筒表) 消印 大正十二年五月二十日

岡山縣 倉敷町外

酒津

児島虎次郎殿

台啓

(封筒裏)

東京市本郷

駒込曙町十五

藤島武二

五月廿日

◇ 藤島がマヌキャンを依頼する手紙(四)が児島の帰国前に届き、児島は取りあえず代金を立て替えて購入し、日本へ発送するように手配していた。おそらく児島からこのことを知らせる手紙が藤島に届き、それへの返事であろう。また藤島が自宅を新築中で、五月末頃には完成することがわかる。

六、一九二三年八月十一日付書簡

其後御疎情に

打過候處

貴家益々御清

祥奉賀候

扱て 文化協会

展覽会は酷

暑の砌にて貴兄

の御骨折一通り

ならさること察

するに餘りある

次第に御座候

此紹介状持參

の竹内栄三郎

君は小生の門人

にて見學の為

錦地に趣赴かれ

候間 御多忙の處

甚だ恐入候得共

他に御説明の

御席に御高説

伺ハせ被下度

偏に願上候

尚一二泊の豫定

の由なれど旅館

等も此際満員とて

被察候得共万一

都合が出来候へば

其辺も御指図が

被願なば大幸

の至に存候先ハ

御紹介を兼ね

右御願まで

勿々敬具

八月十一日

藤島拝

兄島虎次郎兄

台鑑

追伸

例のマスキヤンは

未だ何の沙汰にも

不接候處貴兄

の方には何か先方

より通知無く

候や 御序の折御知

らせ願上候

(封筒表) 上部破れにより消印不明

倉敷町 酒津

児島虎次郎様

紹介状

(封筒裏)

東京市

(欠損)

八月十一日

◇ 消印不明ながら、まだマヌキャンが届かない様子であり、マヌキャンは一九二三年三月初めに発注し、一九二七年四月一日に到着したのでその間のものである。「文化協会展覧会は酷暑の砌にて」とあり、一九二三年八月には倉敷文化協会主催で大原コレクションを展示した「第3回泰西名画家展覧会」と「埃及・波斯及土耳其古陶器展覧会」が聞かれた。この条件に合致する倉敷文化協会の大原コレクション展は他にみられないことから、本書簡は一九二三年八月十一日付と考えられる。

竹内栄三郎なる人物が倉敷に行くので世話を頼んでおり、竹内の名刺が同封されている。大原コレクションを見に訪れる人で旅館が満員になっていたようである。竹内栄三郎は松戸に住んだ画家。

七、一九二四（大正十三）年九月三日付書簡

先般來絶て御疎
音に打過心外に
存居候處
貴家御揃ひ益々
御清祥奉賀候
扱て先日は御心に掛
けられ遠方より
白桃澤山御惠
送を忝ふし毎度
御芳情之段
幾重二も御禮申上候
錦地産の白桃は
格別結構に有之候
其上小生近來腎臟
炎之氣味にて
主治医の注意に
より酒肉類を一切
断ち居り今は
如何なる美酒佳
肴の御馳走も全く
要無き身に相成候
際本來大好
物の果物のみは

現在小生の味欲を
満たしめる唯一の
慰藉に有之申候
始末にて小生に取りては
至寶にも比す可く
御芳志之程特に
難有候 深感謝
致居候
先は右御禮旁
御無沙汰御詫まで
勿々敬具
九月三日
藤島武二
児島雅兄
台鑑
追伸 故黒田君遺作展覽
会を十一月五日頃より十日間
美術學校に於て開催する
計畫有之候處經費三千円
位を要するとて第一回有志会
合にて旧友人及門下生中より
先づ實行委員を擧げ其

費用の幾分を各自負擔
することに決定相成貴兄も
其一人に御承諾被下様小生より
交渉致し呉れとのことに有之候
小生は第一回会合には欠席決議
は電話にて聞き小生も其一人に
承諾 其後各部分擔の委
員会を重ね着々進行致居
候處若幸に右御承諾
被下候ハバ単当り二十円宛
出金することに相成候ことなれバ
乍御手数數白瀧君の手元まで
御送金願上候

◇ 切手をはがしているので消印は不明だが、黒田遺作展覽会を十一月
に開くための寄付を募っているので大正十三（一九二四）年の手紙と
してよいだろう。藤島が「腎臓炎氣味」のために酒と肉を一切絶つて
いたことがわかる。藤島は一九二三年開催の第二回朝鮮美術展覽会
の審査員を病氣のために和田英作と交替し、さらに一九二四年朝鮮美
術展覽会第三回展の審査員も高血圧のために辞任し長原孝太郎に変更
となった（註1）。また追伸には黒田遺作展を開くために有志が実行
委員として寄付を募っていることを述べ、児島にも実行委員として二
十円の寄付を依頼している。
（註1） 韓国美術研究所編『美術史論壇』八号別冊附録『朝鮮美術展
覧会記事資料集』五二―五三、七一頁。

（封筒裏） 消印不明
岡山縣都窪郡倉敷町外酒津
児島虎次郎様
台啓
（封筒裏）
東京市本郷曙町
十五
藤島武二
九月三日

八、一九二四（大正十三）年十月八日付書簡

拝啓

高堂益々御清穆

奉賀候 扱て過日は

またく 梨子澤山

御恵送を忝ふし

毎度御芳情之段

奉深謝候 果物は

此頃の小生にとりて

最上の好ム許に有之

候 殊に甘味に

富める錦地特産

の二十世紀は最も

結構にて御好意

難有候 賞味致候

小生に對する御激

厲の御詞感銘之

至り 啻我不才を

省みて慚愧に不

堪次第に候 老成

一層の努力を可心

掛候間不断御鞭

撻御指導之程

偏に奉希候

尚健康の方も近來

幸に良好を保

ち居候に就付き乍

憚御休慮可被下候

刻下当方は所謂

美術季節にて

畫界も稍活氣を

添へるかと被存候

來月初旬には貴

兄にも多分御出京之

事と察上候處

其折には是非拙

宅に御來泊祈上候

勿々敬具

十月八日

藤島武二

兄島雅兄

台鑑

尚御令閨に宜敷御鳳

声願上候

(封筒表) 消印 大正十三年十月八日

岡山縣都窪郡倉敷町酒津

児島虎次郎様

台啓

(封筒裏)

東京市本郷曙町

✂ 藤島武二

十月八日

◇ 藤島の健康を気遣う児島から二十世紀梨を贈られたことへの礼状。
藤島は健康を回復して良好であることを伝えている。

九、一九二五（大正十四）年一月十一日付書簡

過日聖徳絵画館壁画の件に就き御相

談に預り候處拜答大に延引甚だ心外之至
に存上候 扱て同問題に付ては執筆者餘り

多数の事とて自然技術上巧拙の差も甚

しかるべく自分も其中の一人として全部完

成の場合を豫想し聊か背汗の感なき

にしも非るも御同様幸に聖天子の治下

に育ちたるもの偉大なる御聖徳を追慕

し奉る至情に於て何人も渉深無之事

と存候 小生も当初前田家よりの依囑

有之候まゝに自己の未熟をも顧みず

兎に角執筆を承諾致置候次第に有

之候 従来右絵画館建設の進行

上当事者の其順序を語りたる憾は多

少免れぬやの觀あるも已往の事は今更

追究するも詮なく此上は現在の状体

にて最善の策を撰ぶより外無候事と

存候 同事業は其性質上史実を

重んじ絶対自由を尊ぶ純藝術家に

とりては恐れながら餘り面白き仕事

とも覺つず候得共貴兄の誠意と手

腕とを以て尚執筆を躊躇さるゝに至

つては小生其意を得ず強いて御勧め

するも或は失禮かは分らねど折角交

渉を受けられし上からは小生としては貴

兄の御拝毫を切望致居候 作品の巧拙

出来不出来は各人の手腕と誠意の如何

に因つて定まることなれば何とも致方無之候

所 玉石同架の中よりやがて時の批判に

よつて永久に遺るものと漸次改描の必

要あるものと可有之其辺は今より吾々

の顧慮を要せぬ所と思考致候

前述の通りの始末なれば貴兄も奮つて

執筆されては如何 併し何か他に餘

儀なき御事情有之候ハゞ止を得ぬ次第

其をしも御無理に御勧めする譯にては無之

其点は呉々も御誤解なき用願上候

匆々 敬具

一月十一日

藤島武二

児島學兄

台鑑

（封筒裏）消印 大正十四年一月十一日

岡山縣 倉敷町外酒津

児島虎次郎様

貴酬

（封筒裏）*下方は破いて開封したために欠損

東京市本郷曙町

藤島武二

一月十一日

◇ 児島直平『児島虎次郎略伝』一八三一—一八四頁及び、松岡智子、時任英人編『児島虎次郎』、「資料編」【31】として紹介済み。

赤い線の縦罫紙5枚にわたって記されている。「過日聖徳絵画館壁画の件に就き御相談に預り候處」とあるため明治神宮聖徳記念絵画館壁画の一図を児島が担当することに関する内容であることがわかる。

前年の十二月二十七日の『児島日記』には、長原孝太郎と小林萬吾からそれぞれ書面にて壁画の依頼と「対日露宣戦御前会議」の制作に同意するように求められたこと、児島がこれについて「昨日大原氏へ不詳諾の意志あるがいがすべきか相談する 余の自由にまかすのと」と記されている（註1）。柳沢秀行氏は、児島は同年十一月十日に長原と面会しているので、「すでに揮毫者の話はその頃から話し合われていたのだろう」とし、重責ゆえに即座に受諾とはならず藤島にも相談したのだろうと指摘している（註2）。また松岡智子氏は児島が躊躇した理由として、石井柏亭が本来描くはずだった画題を回されたこと、これまでに試みたことのない主題であったことなどを挙げている（註3）。

しかしおそらく児島は大原氏に不詳諾の意志を伝えたときには決心を固めており、藤島にも「相談」ではなく断る意志を伝えたのではないだろうか。この書簡では、なぜ早く引き受けると返事をしないのかと藤島が苛立ちを隠せないまま叱責とも取れるほどの言葉を連ねている。藤島にとってはこうした名誉を断るということは到底理解しがたいことであり、児島の心情には考えが及ばなかったであろう。児島は『対露宣戦布告御前会議』の制作を引き受けて制作に励んだが、

「大原孫三郎氏所蔵 泰西名画展」（一九二七年四月、恩賜京都博物館）、「泰西美術展覧会」（一九二八年二月、東京府美術館）の展示に関わる実務も重なり多忙を極め、過労から完成前に亡くなった。壁画は親しい友人であった吉田苞が完成した。

（註1） 柳沢秀行作品解説、『生誕130年児島虎次郎展』図録、一四八—一四九頁。

（註2） 同右。

（註3） 松岡智子『児島虎次郎研究』二二二頁。

十、一九二五（大正十四）年三月二十八日付書簡

拝啓 過日ハ参上種々御心盡の御歡待
を蒙り毎度御芳情之段奉深謝候

小生時間の都合にて廿五日午后尾道

發急行にて無事帰京致候間御休

慮被下度願上候 先ハ御禮旁右御

報知まで 勿々 敬具

三月廿八日

虎次郎兄

友子様 武二

吉田君に宜敷御鳳聲

願申上候

（封筒表） 消印 大正十四年三月二十八日

岡山縣都窪郡倉敷町外酒津

児島虎次郎様

台啓

（封筒裏）

東京市本郷曙町

✂ 藤島武二

三月廿八日

◇ 児島の元を訪ねて二五日尾道發急行で帰京したことを伝える礼状。
憶測になるが、藤島の訪問が児島の聖徳記念絵画館壁面揮毫の最終判
断に関わるものであった可能性もあるのではないだろうか。

十一、一九二一（大正十）年八月十二日付書簡

（封筒表） 消印 大正十四年七月二〇日

岡山縣 倉敷町酒津

児島虎次郎様

惠展

（封筒裏）

東京市本郷

駒込曙町十五

✂ 藤島武二

七月廿日

◇ 筆者が調査した時点では、封筒と便箋との日付とが合っていないかつ
たので、今回の翻刻では別々に番号をふった。封筒の中に入っていた
書面は、内容から判断して（二）とし、封筒は日付から判断して（十
一）とした。封筒の日付に相当する手紙文は不明。封筒の日付に相当
する手紙文は不明。封筒の写真は便宜上（二）に掲載した。

十二、大正十五年九月十二日付書簡

(手紙の冒頭は、紙継ぎの糊がはがれたらしく失われている。)

扱て先般御地特

産の白桃澤山

御惠送を辱ふし

いつも御芳志之段

難有候深く奉感

謝候 早速御禮状

可呈上處老來

日中の製作に疲労

を感じ夜は酷暑と

蚊軍を恐れて早

く就寝 心に掛りな

がら終遂延引に

打過候始末不免

御諒察御仁免

之程伏して祈上候

甚だ遅まきながら

茲に改めて厚く

御禮申上候

匆々 敬具

九月十二日

藤島武二

児島虎次郎兄

台鑑

尚御令閨に宜敷御鳳

声祈上候

來月頃は例によつて

多分御出京之事と

察上候 此度は是

非茅屋に御投宿

被下度待上候

(封筒表) 消印 大正十五年九月十二日

岡山縣倉敷町外酒津

児嶋虎次郎様

台啓

(封筒裏)

東京市本郷曙町

✕

藤島武二

九月十二日

◇ この年藤島は燕巢会の発足に参加し、六月には《牡丹（其ノ一）》、《牡丹（其ノ二）》を出品した。それに先立つ五月の第一回聖徳太子奉賛会展覧会には《芳蕙》を出品し、充実した制作を続けていたとみられる。書面では夏の疲れを吐露しつつ贈ってもらった白桃の礼を述べている。

十三、大正十五年九月十三日付書簡

拝啓愈御省穆賀上候

此秋南清御旅行の御計図

結構の事ニ存上候 当帝

展御出品の件 昨年推薦

致候 主意にも協ひ是また至

極結構の事と存上候

不取敢右拝答まで勿々

席次郎兄 九月十三日 武二

（封筒表）封筒上部を破っているため消印不明

（備）中倉敷酒津

児島席次郎様

貴酬

（封筒裏）

東京駒込曙町

藤島武二

九月十三日

◇ 児島は一九二六年の第七回帝展に、《瑞典の乙女》、《白衣の少女》を初めて出品し、十一月から中国旅行に出かけて上海、蘇州に約二ヶ月滞在しているため、この年の書簡と考えるとよいだろう。藤島の再三の働きかけによって児島が次第に「中央画壇」に関わりを持つことになり、藤島が満足している様子が伝わる。笹に止まる鳥を描いた木版朱刷りの便箋を使用。「子良」の落款印章。

十四、大正十五年九月十八日付書簡

拝啓

過日御手紙を頂き候處

貴家益々御清穆

奉慶賀候

扱て此度はまた錦

地特産の二十世紀

御恵送を辱ふし

本日慥に拝受 度々

の御芳志却つて恐

縮之至深く奉感

謝候 例によつて特に

おいしく賞味致候

尚先般御依頼申上置

候マヌキヤン及□トワルは

早速御注文被下既に

先方を發送致候

趣 毎度御手数を

煩ハし候段是亦幾

重ニも奉深謝候

此度は近日慥に入手

之事と折角楽み

居候 マヌキヤンの方は男

女体孰れにても差

支無し 尚恐入候得共

以上二品之價格及

荷造費運賃等

御洩らし被下度願上候

本年は貴作を帝

展に御出品被下候趣

開会之上は定て光

彩を添へ候事と

深く期待致居候

小生は中途にてモデル

病氣に罹り他のモデル

は既に殆んど豫約

済みにて代りも難

得閉口致候

先ハ不取敢御禮

まで 勿々 敬具

九月十八日

藤島武二

児島雅兄

台鑑

乍末筆御令閨に宜敷

御鳳声願上候

(封筒表) 消印 大正十五年九月十八日

岡山縣 倉敷町外 酒津

児島虎次郎様

台啓

(封筒裏)

東京市本郷曙町

✕ 藤島武二

九月十八日

◇ 一九二三年三月に児島がフランスから帰国する間近に藤島から頼まれてマヌキャンを注文したが、結局届かなかった。この手紙からは、児島からトワル(画布)とともに改めて注文しなおして、漸く発送された様子である。藤島は児島に帝展に出品することを薦めてきたが、いよいよ作品が届くことを期待し、満足している様子である。この後、十月七日に上京した児島は帝展出品予定の作品を持参して藤島の批評を乞い、修正して翌日また絵を見てもらっている(註1)。藤島自身は、ここでモデルが病気で制作が続けられないと述べているように、この年の帝展には出品していない。

(註1) 児島直平著『児島虎次郎略伝』二〇二頁。

十五、大正十五年（推定）十二月三日付書簡

現下

聖上陛下ノ御異例御同様国民ノ

等シク憂慮恐懼ニ不堪處一日モ

早□□（紙欠損）御平癒御回春アラセラレンヲ單ヲ

奉祈願處ニ御坐候

拝啓 寒氣既に嚴敷候處

高堂ハ益々御清祥奉賀候

当方一同無事消光乍憚御休

神被下度候

扱て先般御依頼致候マヌキャン及トワル

の件は如何相成候や未だ到着

不致候 申伺上候 御機嫌伺旁

右御一報煩度 以上勿々敬具

十二月廿二日 藤島武二

児島虎次郎様

台鑑

（封筒表）消印 年不明、十二月二三日

岡山県 倉敷町外酒津

児島虎次郎様

台啓

（封筒裏）

東京市本郷曙町十五

藤島武二

十二月二十二日

◇ 消印不明ながら、天皇の病状が重い様子から大正十五年と考えてよいだろう。マヌキャンとトワル（画布）が発送されたはずであったが、まだ届かないといので児島に問い合わせを依頼している。児島にとっても悩ましいことであっただろう。結局届いたのは一九二七年三月だったことが藤島書簡（十七）〔実践女子大学文学部紀要〕第五九集に掲載〕から判明する。